「平成２９年度『学びのスタンダード』推進事業」の推進地域の取組

パイロット校名	桑折町立醸芳中学校、醸芳小学校
推進協力校名	桑折町立睦合小学校、半田醸芳小学校、伊達崎小学校

「桑折町の１５歳のめざす姿」の教育を協働で

昨年度まで実施してきた幼保小中連携の「つなぐ教育」を基盤に、育ちと学びの一貫性を大切にした教育を推進してきた。「一人の百歩より百人の一歩」を合い言葉にして、ふくしまの「授業スタンダード」を基にして行った授業の効果が、子どもたちの能力の高まりや学力向上の姿として表れるように願い、幼稚園、小・中学校で日々実践を繰り返してきた。行われてきた研究授業はのべ３５回に上り、着実に授業改善が図られてきたと考えている。

１　推進地域における「授業スタンダード」の活用について

（１）　授業改善の視点として

①　共同研究のテーマとの関連付けや研究内容の焦点化

授業力向上を目指して、各学校では日頃の授業実践上の課題を解決するための共同研究と「授業スタンダード」を関連付けながら、研究の視点を焦点化したり解決の見通しを持ったりするのに大いに役立てた。

②　日々の授業の振り返りとチェックシートの活用

「授業スタンダード」を踏まえて教材研究や指導案作成を行い、指導案の中に改善の視点として位置付けた。また、学期末や研究の区切り等で活用の評価をし、自分の授業に向かう姿勢や技術・ねらいの反省に役立った。

２　パイロット校の取組内容

※　共同研究のテーマと関連を図りつつ、提案性のある授業を実施した。

（１）　パイロット校Ｉ（醸芳中学校）の取組について

①　共同研究のテーマと「授業スタンダード」の関連と焦点化

研究のテーマを「自分の考えを持ち、表現できる生徒の育成～生徒の意欲を引き出す『○○したくなる授業』実践を通して～」とし、全教科で「教材との出合い」「学習課題の把握」の工夫を行うことで、生徒の学習意欲を喚起するとともに、「追究・解決」段階で自分の考えを持つ場面と表現する場面を意図的に繰り返し設定した。

②　数学科における「タテ持ち」の取組について

数学科の指導者は４名おり、週に１コマＴＴを実施してきた結果、次のような成果が確認できた。

ア　１学年から３学年の生徒を担当することで､教材の縦の関連や指導上の留意点、生徒の学習の実情などを把握することができた。小学校段階での基礎基本の定着状況を確認しつつ、中学校ではその徹底に焦点を当てることができた。

イ　数学科の授業を通して、多くの教員の目で１～３年の生徒の学習・生活状況を把握することができ、生徒指導上の課題に関わる情報提供ができるようになった。

具体的には、以下のような指導体制をとった。

	１組	２組	３組	４組
１学年	教師Ｄ（教師A）	教師A（教師D）	教師A（教師B）	教師A（教師C）
２学年	教師Ｄ（教師A）	教師A（教師B）	教師B（教師C）	教師C（教師B）
３学年	教師Ｄ（教師C）	教師C（教師A）	教師B（教師C）	教師C（教師B）

※　T1（T2）、TTは週１コマ

（２）　パイロット校Ⅱ（醸芳小学校）の取組

①　「授業スタンダード」の活用

「授業スタンダード」の展開における「個での追究・解決」「ペア・グループ・学級全体での話合い」を重要視し、児童の活動状況を見取ったり支援したりする教師のコーディネート力を高めることに研究の視点を当てた。研究の重点化を図る際の基礎的基本的な授業の流れを示すのに役立った。

児童がこれまで学んできた内容・技能、経験、方法等の「学習経験の総体」としての「学びの履歴」を指導案に位置付け、単元の系統性とともに児童の学びのつながりを把握することから教師のコーディネートが始まっていくと考え実践した。

②　教科担任制の取組について

推進教師が６学年２クラスの算数科、５学年２クラスの理科を担当した。算数科では、推進教師が単独で授業をしたり担任とＴＴを実施したり単元や児童の実態に合わせて効果的に指導体制を整えたりしたことで、児童が学びを高める姿が明確になった。

３　推進協力校の取組内容

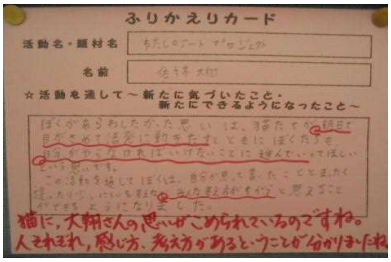
※「授業スタンダード」と協力校研究との関連

（１）ペアやグループでの話合い活動の充実

ペアやグループ学習で自分の考えを検討

話合いで重要なことは、自分なりの考えを明確に持ち、ペアやグループで話し合い、自分の考えを吟味して追補して確信し、全体発表に向けて自分の考えを整理するなど、その目的と時間を教師が設定すること、また、吟味された主発問と効果的な活動、机間指導における見取り、意見の取り上げ、考えをつなぐことが教師の授業力として大切な場面であると認識できた。

（２）教頭、教務と担任によるＴＴ指導体制による実践



小規模校において指導の効果を上げるために７学年の支援を設定した。ＴＴ指導が効果的な単元において、習熟度別に対応した授業を実施した。

（３）「振り返り」を活用した授業づくり

日常の授業でも「振り返り」を行うことで、学びの連続性が生まれ、学習内容の定着が図られた。児童それぞれの振り返りの質の向上と次の学習へのつなぎを意識し、家庭学習の質の向上へもつなげたい。

自力解決の時間確保と学習内容の充実

（４）自力解決・発表の段階を中心とした研究実践

児童が自分の考えをしっかり言葉にまとめ、全体に発表する状況を教師が見取ることができた。発表できたこと、称賛されたこと、全体に理解して貰えるように言葉や方法を駆使して表現する経験は、児童の自信となる。教師は児童の言葉を言い換えたり、繰り返して明確化したり、追補したりして発表を支援する。教師の授業コーディネート力が児童の理解・意欲を促すことが確認できた。

個の考えを学級全体へ広げ、確認を図る

４　成果と次年度へ向けて

（１）「授業スタンダード」による基礎基本の再考

授業を様々な観点から見る視点を得て、日頃の授業を自分なりに評価することができた。めあてとまとめの明確化に向けた板書構想や思考を整理するためのノート指導など、共通理解のもとに取り組みたい。

ペア、グループ学習での考えの発信

（２）幼・小・中の研修交流が町全体の取組へつながり、多様な視点から授業を考察

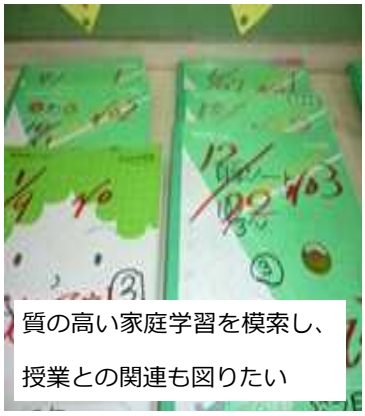
幼・小・中それぞれの授業を参観し、協議することで、使用した教材の価値や授業者の意図と言語活動のねらいとの関連、基礎基本と活用へ向けての理論づくり、幼児・児童生徒の実態等について理解を深めることができた。幼稚園は小学校の、小学校は中学校の教育を考えて授業を構想するようになった。

（３）「教科担任制、タテ持ち」の効果確認と指導体制の工夫

指導体制を工夫することは、日頃の授業を振り返るきっかけとなり、十分その効果を確認することができた。次年度は、専科教科の持ち時数や校内指導体制を工夫することで、効果的な実施を検討したい。

（４）「ふくしまの『家庭学習スタンダード』」の活用

現在、各学校で実施している家庭学習・自主学習の充実と徹底、学習内容・方法に関わる「自己マネジメント力」の育成も、次年度は実施していきたい。


質の高い家庭学習を模索し、授業との関連も図りたい